

秘

俘虜生活之現狀
獨逸國民性

大正七年二月

俘虜情報司



序

歐洲大戰亂、精神上及物質上ニ於テ偉大ノ教訓ヲ吾人ニ與テ畧シ我
國青島ノ堅壁ヲ拔キ獨塊國ノ倭虜ヲ收容シテ以來將ニ四日生
霜ナラントス收容所諸官且茲春之ニ梅シテ其民性及特質ヲ研究
シ其結果ヲ蒐録シ以テ一冊子ヲ成ス短日月ノ觀察示固ヨリ其全邊
徹ヲ期スヘカラスト雖又以テ全豹ノ一斑ニ此現フニ足ランカ若シ夫之ニ
頼テ我軍隊及國民ノ教育資料ニ得ハ何ノ幸カ之ニ過キンハ

大正七年二月

結言

本邦ニ收容スル獨逸浮屠ノ數ハ僅ニ四千三百四十有餘^名過^名此數者資料トシテ獨逸國民性ヲ云ニ爲スル如キハ聊カ無謀^名感^名ニ非スト雖モ幸ニ獨逸ニテ大聯邦中ノ各邦ノ者浮屠中ニ網羅セラシ其職業未^名如キモ殆其種類ヲ理^名餘^名所^名ナシ且夫三年有餘ノ長時日彼等ト起居ヲ俱^名セ^名我收容所所員ニ於テ彼等ノ衣食住ノ一般狀況ハ勿論其他各個人ノ行住坐臥一舉手一投足悉ク其視聽ニ映セサルナシ從テ其觀察使^名ス^名止^名鵠^名ヲ失ヤサルヘキヲ信ス唯細部ノ事項ニ關シテハ各人相互ニ觀察示ラ異スルモノアリ恰モ廬山ノ真面目ヲ識リ得サル如キ所ナキニアラサルヘキモノヲ以テ單ニ擔言板蕩的觀察示^名ト^名謂^名ハンヤ故ニ各收容所ノ觀察ハ假^名テ之ヲ省略スルヲナク載録スルヲトセリ

第一章 獨逸人の特性

第一自負心強ク執拗ニシテ傲慢

獨逸人の頗る自負心強ク傲慢ニシテ執拗ナリ吾人の常ニ謙讓ヲ以テ美德トシ幼時ヨリ「實言をばと頭をかきり稲穂かな」主義ノ下ニ訓育セラレ亦常ニ此主義修養ニ努ムルニ反シ彼等ハ偏ニ頭ヲ高ク仰テ「肩身ヲ廣クセヨ」以テ箴言トナス故ニ邦人の眼ニ映スル彼等ハ言動ハ安良ニ無遠慮有テ顔ニシテ頗る威感ニ堪ヘサルアリ一方又彼等ハ頗る執拗ニシテ其一度企圖シテ希望至セシ事項ハ其是非ヲ問ハス之カ貫徹ヲ期シテ存虜ニシテ其一事ヲ願出テ許可セラレサルモ決シテ断念スルコトナク時ヲ固執ニシテ其ニ他ノ所員ニ哀願スル下數回反フ又彼等ノ中ニハ未ダ世界統一ヲ夢ミ他國人を眼下ニ見ントスノ風アリ若シ試ニ存虜ニ付各國之民性ヲ問ハニ日ク英國國民ハ俄ノ如クロバ大ニコレ多クテ存虜ヲ實行之ニ伴ハス露國人の「ウオッカ」中毒ナリ佛蘭西人の滅亡ニ瀕セル國民ナリ其

他米國人ハ何又那人ハ何ト他國人ハ短所乃至其國ノ政策ヲ舉ケ來テ之カ缺點ヲ指摘シテ餘ス所ナク加之也、長所モ亦併セテ之ヲ批難シ獨逸ハ尙其以テナリ又獨逸ニハ之ニ代ルニ斯ノ如クセリト稱シ他國ニ對シテ一步モ讓ラザラント期ス故ニ吾人の直覺的觀察ニ依リテ傲慢不遜唯我獨尊的ニシテ執拗ニ且ツ排他的ト認めらる然レトモ其善意ニ解セハ頗る進歩的徹底的主義的精神ニ富ミ忍耐カニ富ム優秀ナル國民ト評ハサルヘカラス

例 語

一飲酒セバ直ニ予ハ獨逸人ナリ高言ヲ吐キ其意天上天下獨逸人ヲ指シ他二人ナク世界中最強最優秀ノ人種ナリト自任スルモノニ似タリ(吾野原)
二我輩ハ歐連日十四里ヲ連續行軍ニ耐ルル獨軍ハ如何ト問ニ對シハ日十四里ハ獨軍トシテ普通通行屋ナリト豪語シ又日本軍ハ食ニ一個ノ握飯一個梅干ヲ取リテ尚且ツ能ク長日月戰闘ニ堪ヘ獨軍果シ

三如何ト問ハ彼平然トシ獨軍亦一塊トシテ食トシテ如何ナル戰鬪行
軍ニモ必ス之ニ堪フト答フ一曰存虜之率ハ効外ニ散步シ山中ニ於テ道ヲ
失シ矮樹荆棘ノ密林中ヲ踏被スル約ニ時聞ニ又ニ爲ニ彼等ヲ被服ハ
裂カ顔面ヲ指シ血痕ヲ見ルモノ多クカリニ拘ハリス一人ノ苦痛ヲ訴フ者
ナク却テ快武ヲ叫ヘリ又其日山中ノ行軍約八里ニ及ビ時平素行軍
ノ練習ニ遠カレシ彼等ハ頗ル疲勞ヲ感アリ因テ問フ三疲勞ヲ見ル
ヤ否ヤヲ以テス而カモ其口同音ニ之ヲ否定シ去リ中ニハ足痛ニ悩ム者ア
リシト雖終天ノ落日者ナク歸所セリ(大分)

三收營當初ニ存虜罪ヲ犯シ重營倉ニ銅セシ人良甚ニ方リ傷兵彼ハ
與ルニハト茶ト以テス彼其茶ニ白氣アリテ飲テ難キノ故ヲ以テ水ニ請
求セリ然レトモ言語通セサル爲メ依然毎食茶ヲ與ヘタルニ彼憤怒シテ三
日間遂ニ之ヲ一箱モロシモ偶々所員ヲ巡視ニ際シ水ニ之ヲ訴フ乃チ水
ヲ與フルニ彼欣喜牛飲ス(大分)

四我軍憲兵某事項ヲ願出テ下スルニ際シ出當然却下セラルヲ知リソシ猶
萬一僥倖シテ或ハ甲ニ或ハ乙ニ請願シテ尚時ト處トヲ替ヘテ更ニ丙ニ
轉ニ戊ニ至ル一度企圖セル事項其是非當不當ヲ問ハス銳意ノ力
ヲ貫徹ニ努ムル概ネ如此(習志野)

五一存虜ニ重營倉ニ處スル其戰友一人出督術技ヲ示シ毛布ヲ持參シ
テ許ヘテ日ヲ願ハクハ此毛布ヲ入倉者ニ給セラレシト依テ重營倉ニ處分者
ハ毛布ヲ使用スルヲ得ズ汝亦能ク之ヲ知悉シテ反問セリ彼抗言
シテ曰ク我獨違入此寒氣ニ毛布ナクニ夜ヲ明ヌ如キ人種ニアリスト
依テ大ニ彼ヲ叱責セルモ彼猶自己ノ非ヲ認メス抗爭セルヲ以テ終ニ重
營倉者三十日ニ處セラレハニ至リ(名古屋)

第二組織的ニシテ勤勤實實

彼等強健な体ヲ加フルニ前述執心ヲ以テスルノミナラス元來組織的頭腦
ヲ有シ獨創的精神ニ當ル彼等事業ヲ書ルヤ先ツ學理及經驗ヲ

其トシテ總て對テ準備ヲ了スルニ非カハ其者キ也ス而シテ一旦其者キス
ルヤ勤勉ト執ヲカトテ以テ力行奮闘ニ止マズ此特質ハ國民共有ノ美質
ニシテ近代ニ於ケル獨逸帝國ノ勳輿亦此ヲ賜リ彼等ノ重物ノ輕重難易
ニ關スル此特性以テ之ニ醫ム又無為ニ時ヲ徒消スルハ社會ニ對スル不徳
ナリトシテ大ニ年ニシテ所謂鶏ヲ割クニ年カヲ用ニルモ辭マズ全精力ヲ其
事業ニ集注ス又彼等ノ作業時間ノ長短ヲ論セスレテ寧ロ勤勉濃
度大ナランヲ欲ス又一度仕事重者手スルヤ幾回失敗スルモ決シテ挫折セズ夫敗
毎ニ却テ益ヲ努力ヲ倍シ從テ初志ヲ貫徹ニ得ル始メテ止ム彼等ノ又乃
事未成ノ儘ニ放置スルヲ屑トセス及テ限リ一氣ニ之ヲ成就セントス是レ夫
ニ他事業ニ從事シ得ルヲ爲シテ換言スレバ更ニ進テ活動セシカ爲常ニ
之カ餘裕ニ當ハント欲スニ外ナラザルナリ
以上述べタル如ク彼等ノ特性トシテ事業ニ企圖スヤ其計畫頗ル緻密ニ
且其實行ノ爲メ頗ル熱心勤勉ナリ成果ヲ收ル元々ヨリ當然ノ歸結

ト謂ハサルカラス尚之ニ加フルニ彼等ノ元來實業ナリ文明人カ勤モルハ其業ヲ
好ミ輕能淺薄ニ陥ルニ反シ寧ロ實利主義ニシテ其業ヲ去リ富貴ニ就クヲ
以テ信條ト爲ス例ハハ彼等ノ自當所持スル軍裝品時計被服類如キヲ
見ルニ外觀形狀等ハ敢テ意トスルコトナク唯堅牢ニシテ實用ナルモノヲ選ス
就中彼等時計ヲ見ルニ銀側以上ノモノナキモ其機械ハ頗ル優良ナルヲ以テ知ル
ヘシ然レトモ尚之ト同時ニ彼等ハ高價ナルモノ堅牢ナルモノヲ使用シ高價高
キモノ若シモ其高價ハ食品ヲ採ルコトヲ忘レサル點ニ注目スルヲ要ス俾テ其體格
検査表附表第一ノ如シ
今彼等ノ組織的ナル例トシテ物品検査法ヲ左ニ託載ス

例 話

俾テ其物品検査法ヲ見ルニ常ニ二品毎ニ検査ヲ行ヒ且其方法頗ル便
利迅速ナルモアリ即チ彼等ハ検査セントスル物品ヲ豫メ各共ニ知ラシメ
之ヲ携行シテ舍外ニ列ニ敷列スルヤ検査官ハ羽裏ヨリ検査ス今於テ

ヲ検査スルモノトセハ兵卒ハ袴、上部ヲ袴ケ先ツ其後部ヲ検査官ノ兵
檢ニ便ナル如ク高ク保ツ此部ノ検査終ハ兵卒ハ之ヲ翻轉シテ前部ヲ
検査ニ供ス次ニ検査官ハ袴、下部ヲ合セ兩半ニテ敲キ若シ塵埃起
ラハキハ不充分ナルモノトシテ袴ヲ兵卒ノ頭上投ケク上衣服、靴、毛布等、
検査法モ皆之ニ準メ尚存膚ハ齒磨粉、齒磨粉場子、拭等ノ私
有品ニ至ル迄悉ク同様ノ検査ヲ行フ數品同時ニ行フ時ハ兵卒ハ先ツ
検査俟セザル物品ハ肩、懸ケルカ、或ハ地上ニ置クヲ常ニ存膚下土ノ言ニ
依テ獨逸軍隊ニ於テハ毎日此種ノ検査ヲ行ヒ一週間ニテ全部検査ヲ
終クスト修整ヲ要スル検査ニアリテモ亦兵卒ハ各其破損品ヲ手ニシテ
一列ニ整列シ検査官ハ習熟ヨリ順次ニ之ヲ莫檢ス此際兵卒ハ破損
箇所ヲ指シ或ハ兩半ヲ以テ發見ニ便ナル如ク推テ持ス(名古屋)

第三、規律的觀念

苟モ彼等集團ヲ成スヤ直ニ先其全体ノ意志ヲ左右スル或物ヲ設定シ

而シテ皆之ニ服從スル習慣アリ是レ畢竟個人權利ノ衝突ヲ避クル手段
ニシテ查ラサレハ彼等ノ社會トシテ團體ナル生存ヲ遂ケ難キカ爲メナルシ
彼等ハ自己ノ身ヲ處スルニ好テ規律ヲ設ケ自ラ束縛スル如ク見テ放縱ナル
異人特ニ東洋ノ其家條流ヲ以テ放棄長テラレル時代人ヨリ見ルトキハ寧
口頭ルカ躬屈臑ニ能ハス即チ日本官吏ヨリ彼等ニ對シ何等ノ課
程ヲ與ハズ唯起床就寢點鐘食事診斷時刻ニ是レニ其他ハ百千
睡スルモ運動ヲ行フモ讀書スルモ勝テナリ然ルニ彼等ハ自ラ豫定表ヲ
調製スル課目ヲ持テ三時針ノ如ク改々トシテ倦マヌ

第四、個人主義ト權利義務ノ觀念

一般ニ獨立獨行ヲ望ム濫ニ他人ヲ援助スルヲナク又自ラ之ヲ受ケルヲ好
マサル氣風アリ親族朋友モ皆頼スヘカラスハ頼ルヘキハ一ニ金錢アルミ故
自己ニ利害ノ及フ所ハ應吉モテ方便ト看做シ敢テ背德トナサズ著
アリ彼等ハ吾人ノ如ク非ト認見ルモノモ自己ニ利益アリハ敢行ス人之

ヲ詰レハ期ルヲトハ以前ニモ爲シタリ其時誰モ何トモ云ハサリシハ行ヒ
テ天可ナルモト思惟シタリトノ道辭ヲ以テ自己ニ非ヲ知ラザルモノハ如シ
個人ノ自由個人ノ利益ハ絶對的價値ヲ有スルモノトシ社會自ニアリテモ此
絶對的個人ヲ基點トシ個人ノ利益ヲ前提トシ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ
主張セザルモノナシ凡テ個人ノ利益ヲ保護スルハ個人ノ權利ナリト思惟ス故
ニ此可テ彼等個人ノ利益ニテ損ハルハトアレハ直其事情ヲ計ヘテ之カ
賠償ヲ得ニトシ思惟ス其志モ遠慮スル所ナシ之ヲ要スル個人主義的思
想及權利義務ノ觀念ハ元々歐米人一般ノ通有性ナモ獨逸人之ニ
彼亦亦ノ自負心ヲ加ヘテ一日百思シテモ厭アリ

例 評

一德島ヨリ日本(音)語學ヲ研究スル爲メ金屬シ生並離ヲ隔テ、仔虜ニ文
通ヲナス者アリ其志原ハ之ニ對シ返答ヲナシタル爲メ重役官五日ニ處セラレ
タリ其際彼ノ規則申シ離ヲ隔テ、文通スヘカラストノ條文ナシ之ヲ斷テケ

ナリシハ寧ロ日本官憲トシテ遺漏ナレト陣述セリ(板東)

ニ點呼號音ヲ知ラマ熟識スルヲモモ隣席ノ仔虜ニシテ之ニ注意ヲ與ヘ
ルニ床心シハハスナク其處罰ヲセラルカ如キハ其志モ分ル所ニアラス其不
親切ヲ責ムハ人ハ人ナリ我ハ我ナリト答フ(板東)

三室内ニ事見ニ晚リテ偶ニ降雨ヲ知ニカル者アリ其志モ布ツテニアルコ知レル
友人幾多アリタルモノトシテ本人ニ降雨ヲ報スル者ナク斯リテ本人降雨
ニ料付キモ布ヲ取入レタルトキハ雨水ノ濕潤甚シク既ニ夜間ノ用ヲナサ
ザルニ至レリ(板東)

四郵便檢閲終リシ際偶ニ將校來リタルヲ以テ之ニ本人ノ令ヲ授與シ兼テ
同室ニ在ル某郵便物ヲ在女託セントセシシ彼ハ之ニ應答スニテ日々某ハ後
刻自ラ受領ニ來ルヘシ他人ノ物ヲ持去ルニ理由ナシト(板東)

五一進士官アリ日本語ヲ自習シテ上達シ日常ノ用ヲ辨スルニ支障ナキ至
ル同僚ヨリ買物ノ益辭ヲ依頼スレハ余ハ他人ノ爲メニ爲メニ非ストテ拒

絶ス(板東)

六珍菓本園ヨリ到着スルモ同(食卓者ニ垂送セシメツ、燭リ之ヲ食シテ平然タリ(板東))

七有辨ヲ以テ點シタル電燈ハ障障者ニ先ヲ與フルヲ欲セスニテ必ス之ヲ遮蔽ス(板東)

八國氏軍兵ヲ「リヒター」及「ヤンセン」ル者ヲ常交誼殊ニ篤カリシカ一朝ノ利害關係ヨリ忽チ紛争ヲ惹起シ昨日ノ文情ハ今日ノ仇敵トナリ其來現時ニ至ル迄殆ント言語オモ交フルコトナシ(青野原)

九各「バラック」兩室中央通路ハ兩室ノ兵卒ヲ以テ掃掃スルヲ棟命シテリタルニ常ニ該部掃掃ヲ於テ兩室給糧ヲ釀シ許出ルコト一面止ラス(青野原)

十大阪收留所火災厄ニ遭ヒシトキ其身ノ危殆ヲ顧ミテ消火盡意セシ者アリ之ニ對シ所長ヨリ賞詞ヲ與ヘタルニ彼答テ曰ク是レ只予ノ義務ヲ盡シタルノミト元ヨリ如此ハ五百有餘ノ俘虜中僅ニ三名アリシノミ中ニ予ハ第一番ニ火災ヲ發見シテ報告シタルニ拘ラス所長之ヲ賞與セスト不平等ヲ述フル者スラテリタルモ要スルニ彼等ハ一般ニ義救カコ主張ス(似島)

十一小屋ヲ有スル者アリテ一戰友ヲ同居セシムルモ其戰友ハ決シテ無慮ニテハ同居スルヲ得ズ即チ同居ノ權利ヲ得タルニ至ルヨリ若クハ燃カフヲ以テ之ヲ代償ヲ拂ハサハカラス彼等ハ斯權利ヲ主張スルト共ニ又其義務ヲ自覺ス故ニ一品金ニト雖他ヨリ也其ヲ欲セズ其並ニ之ニ對シ

(調査野)

去書ニ感ズ大ニ敬テ正シテ復ニ讀ミ綴リ教示又ハ其他ノ學用ニ使シ函
後不同ニ正トキハ之ヲ解キテ不淨紙等ニ使用ス(調査野)

停六箇年ノ第一歩ナリトハ彼等ノ日常ニヨリ自ラ啓言戒ル所ナリ何
事亦ニ又精細ニ行フニ正確ニ理解セシム不可能ヲ不可能トテ放
主ニ以テ之ヲ一ニ事奉ル身目的ニ向テ突進スルニ是レ彼等ノ精カ
ク其研究ノ徹底的ニテ持續的ナリト本邦人ノ心然ニ熱シク
然若打テハ其研究ノ果ニモテリ彼等ノ研究心ハ殆ト截止スル所ヲ
ナラスニ益々進ミ入り徹底的ニ行フ而カモ能ク進正確ヲ期シテ已
ニ之ヲ研究スル者トスルハ如何ナラ難シ速速スルニ致シテ意トセザル
他者ハ一經ニ停居カスルノ境速ニ以テ研究上絶好ノ機會トスルモノ如ク一

意事ハ改メテ正シテ諸君ノ研究ニ詳念ナリ將故以下時間解ス
海陸書ヲ讀ムトシテ食事一途ノ娯樂消遣時間公私雜役時間
等ノ降ケハ眼ノ言語諸事ヲ離スルニ當テハ一區譯リ停居海軍主
ヲ停居下談話ヲシテトキ彼ノ何故ニ日本人ノ時間ヲハ別々多
ク娯樂消遣諸事ヲ離スルニ當テハ一區譯リ停居海軍主
自宜ニテハ此點先考ニ或ハ特種ノ研究ニ從事スルニ當テハト謂ヒシ
コトナリ彼等ノ日常決メテ時間ヲ送消スルニテ身休検査又ハ諸君等
於テ研究ニ當テハ自ラ決メテ時間ヲ送消スルニテ身休検査又ハ諸君等
コトナリ彼等ノ日常決メテ時間ヲ送消スルニテ身休検査又ハ諸君等
其研究時間ハ短クシテ從前ノ職業技術ノ間ナル者自ラ精外教出テ諸君等
地理歴史或ハ國土調査等自ラ一種ノ文部學ノ研究先資料
コトナリ彼等ノ日常決メテ時間ヲ送消スルニテ身休検査又ハ諸君等
止マシテハ此方面僅ニ新聞雜誌等ニ採テ對談一部ヲ知ルニ

高木

日本語の研究法ヲ究リニ口語文語ニ區分シ定ニ文法ヲ研究九ニ其ノ
修得シタルトハ直ニ之ヲ實際ニ應用ス而シテ彼等カ日本語研究ノ爲
強ク欲所莫ク如クモ其社若シ地ニコレヲ問ハルモ之ニ答ハサルコト
屢クテリ日本語ヲ稍解スル俾居ニコレヲ曰ク人ヨリ行書ノ業書自カ受
領スルコトアルモ彼ハ通譯ノ許ニ來リ初ハ階書ヲ解スルカ故此業書自
コ階書自ニ直サレト依頼ニ敢テ獨譯ヲ願フコトナシ
當ニ又リ、信書ニシテ、信書生活モ既ニ三年ニ及ハリ曰ク兩語ニ
就達ニ業書上ノ取引ニ何カ事ノ工障ナカルトシト問ヒ至レリ後
ク以テ如何ニ研究心ヲ研キカヲ知レリ
彼等カ社心ニ外國語ノ研究スルハ産ク且ク精確ニ世界各國
人カ知リ以テ自ラ大ニ發展セトスルモノ如シ彼等ハ自國ニ通書セ
界ヲ村タリト自信シツウモ當多ク他國語ヲ習熟セテ將校シテ

兵部ニ就テテ語學ヲ學ブ者アル等吾人カ此點トスルニ足ルモ、財カニ
今茲ク考為俾居、外國語修學者、調ヲ附カテ附表第ニ如シ

例話

一後備兵ニシテ收買後新々本邦語研究九ヲ開始セルモノアリ彼等
ハ毎日起床後若干時間、散步ノ際ヲ利用シ「カード」式四單語暗記
ヲ持續シ三年前ニ始メタルモノシテ今ヤ孟子論語等ヲ讀スル者アリ
曰クトハ「袖張ヲ有スル習志野」ト云フハ「シヤール」ト云フハ他曰
伯林大學曰本歴史ノ講座ヲ擔任スル目的ヲ以テ盛ニ日本語ノ研究
ニ從事シツワリ「習志野」
二位處中一農夫ハ曾テ新穀ノ間ニテ曰ク一稜ノ米粒九十四顆乃五ノ百
ニ十七顆ニルヲ見ル其穀粒ノ範圍ニト長大ナルトハ收穫ニ勤心ヲ利ト
スルヤ書作ト云作トシリ「徳ノ顆粒ニ幾クシテ生スルヤ旦ツ一粒ノ重
種」蓋如何ト又曰本養穀ヲ研究セントシテ一様ノ産卵教婢化遊意

或曰日救之要スル者量也爾一箇一産量之ヲ生スル者長キ事
精細ナル調査ヲ在テ或ハ本邦労働者ノ労働時間休耕ノ割合
労働者ノ損料天候ノ良否ニ依リ健全ノ規定ヲ定メテヨリ日
長短ニ依リ産量ノ結料規定等ヲ研究セルモノアリ(板東)
云収容所積込ニ草花類ヲ栽培スルコトヲ許可スルニ依リ種ヲ
増ヤ又之ヲ培養食スルニ際シテ大ク之ニ経験アリ同僚ニ就テ説明
ヲ求ムルニ或ハ書籍ヲ購入シテ研究シタル後ニ北オシムコト下ヤク而
シテ其實施法ハ肥料ノ分量注水等先ニ研究セル所トナシモ毛ニ違
リナク行ヒ然レ後其成績ニ詳テ氣候溫度土質等ノ影響
ヲ林育ノ適宜ノ修正ヲ加ヘテ更ニ培養スルコト以テ逐年好成績
ヲ得テ(似島)

四、彫刻ノ對於産業方ヨリ厚ニ木材購入ヲ出願スルコトアリ而シテ
日本特許モノナル以テ如何ニシテ之ヲ知リシテ問題ニ依リ日本

彫刻織物其他美術ニ對シテ關係文ノ結集ハ甚ダ重要ナル事
研究ニ依リテ何ノ地方ニ産シテ何ニ使用セルハ日本ノ人ト
雜事同然ニテテハハ知悉セラル事價ヲ詳細ニ而シテ毛ニ違
スニテハ何等ノ程度ニ記憶シテリ(似島)

五、所内ニ於テ風測器ヲ設ケ隨時其停ヲ止リ風速ヲ為草
木ノ動搖ニシテ程度並ニ身体ニ及ボスニ感等ヲ以テ器械ハ皆
系ニシテ米中救ノ對照ニ依テ以テ瞬時ニ風速知覺ヲ得ル程度
ヲ為シテシ(似島)

第七常識

獨逸ノ國民教育完全ニ普及セリ、結果一般ノ常識ニ當ル事ニ
一歩上ト雖も國ノ總理大臣外務大臣ノ名ヲ知ル者タタキ其他歴史
的及地理的著明ノ事價ハ略シテ之ヲ知リ殊ニ將校ニ至リテハ法經經
濟外交ニ關スル諸事ヲモテ十分ニ熟板ヲ百ニ磨シ

僑居人の其地方ニ依リテ多少其性質ヲ異ニス例ハ東北地方ヨリ
 北部海岸ニ沿フ地方ハ稍鈍重ニシテ熱ハナルモ西北部地方ハ種族
 ハ敏捷ニシテ狡猾ニカカシ彼等ハ一般ニ悠々道ニサレ態度ヲ有シ
 動作一見鈍重ノ如キモ必ニシモ然ラズ日本ハ海雨ニ遇ヒテ走り
 重車ニ乘リ後シトシテ走り重車ノ未ダ停車セサルニ降リテ又
 ハシテニ彼等ハハコテニスレ其他遊戯中流然ル血ヲ覆スカ如キ大雨ニ
 降會スルモ供々網ヲ外シ球ヲ捨テテ泰然トシテ其堂ニ飯ル常
 トス然レトモ人ノ機微ヲ察スルコト敏捷ニ其遊戯中ニ於テハ動作
 ハ比較的機敏ナリ
 彼等ノ恒該ニ曰ク「速ニ散行スルハ成功セルナリトサレトテ
 彼等ハ社説ルモスニテ野々ニ事業ヲ始ムレバ如キ傑出者ニア
 リマ常ニ生理及冥冥際方百ヨリ研究ニ研算確實莫ルニ及ヒ
 テ散行ス

第二章 國家的觀念

改米諸國ノ其建國ノ歴史ヲ印トシテ寫シルコト以テ吾人ノ有ルニ
 吾愛國ノ念ト其根本ニ於テ相通セハ歎歎ヲ寄セサルモ獨逸國代
 々其外觀ニ於テ比較的我國ノ念ニ近キモノ有ルハカヲ思ハシム然レト
 モ結句彼等ニ於テモ亦愛國ハ本ニシテ忠君ハ本ナリ換言スレバ愛國
 故ニ忠君ナリ忠君ハ故ニ愛國タルニ非サルナリ
 獨逸國ノ其地理的關係上西隣海峽ニ又國ニ接壤ニテ是ヨリ以
 テ「自國ヲ守ラシムル」念ハ痛切ニ彼等ノ眼ニ透徹シ自然の昔
 時ヨリ愛國精神ニ養成セシタルモノト云フニ而カモ其統治者
 一ニテ「ナ」ハシラオレシレトカ或ク利益下ニ忠君ヲ勵ムレ
 ニシテ愛國ノ諸策次ヲ志國ト呼ビルモノナリ而シテ此志愛國忠君の
 精神ハ曠古無二ノ多シ故ニ獨逸國人ノ到底「忠」及「愛」ナル所ナリ
 此等ヲ證明セシタル南部獨逸傳屠ト雖モ皆「ナ」ハシラオレシ

此は好意を有し復獨逸皇帝に謳歌スルモノアリ然しトモ
皇帝に以テ主權ヲ奪ヒテシタル最高貴族トモニ過キザレ
ノモアリ

上述如く獨逸人の權ヲ行使シテ其中心に吾國的精神ニ當リト
雖其國に來ルル所ヲ研究スルハ大ニ我ト異ナルモノナリ所謂以テ
大ニ非ハルモノト謂フコト得シ前章中獨逸人の特性を叙セシ如ク
彼等個人主義及權利義務の觀念ハ其目的ナルモノナラズ
教育亦及シ為改善ノ指導宜シキヲ得ル結果合理的個人
主義トイフ彼等個人利益或程度迄ハ國家利益ニ一
致ス國家危ケレハ個人亦危シ國家ノ存スレバ個人亦犧牲ヲ要
スベキヲ知悉ス彼等ハ意識的ニ又無意識的ニ國家組織ヲ以テ
人種ノ存立発展ノ為ニ進化法上最モ優劣ナルモノト爲シ最モ利
益ナルト信ス弱者生存スベキ餘地ハ世界ニ皆無キト確信シリ

即チ國家ニ強ハ自己ニ強キ故ニ若シ自己利益ヲ保セシ之ヲ増大
セントセハ國家ヲシテ世界中ノ最強國トラシメサルハ可ク又此目的
ノ爲吾人ハ忠君愛國ノ義務アリト云ハ是レ彼等ノ國家ニ對スル
觀念ナリ

方今歐米ノ文物我國ニ輸入シ個人主義的觀念及權利義務主張
漸次盛ナラントスルニ當リ為政者宜シク此間ノ消息ニ注意シ國民ノ
指導ヲ怠ラサルヲ要スベシ聞クカ如クハ獨逸ノ最大長所ハ小学校
教員ノ養成ニアリト獨逸ハ小学校教員ノ養成ニ努力セルコト茲ニ
歲アリ即チ小学校教員多クノ資格トシテ師範學校ヲ卒業スレ
且實施教育ノ經驗ヲ積ミタル上第ニ回ノ試験ニ合格シタルモノニアラ
ザレハ採用セラレズ而モ其待遇頗ハ宜シキヲ得斯クテ其國民教育
ニ於テ熱烈ナル愛國的精神ヲ涵養シタリ見童ノ就學率ハ
世界最優等ノ位置ニナリ加之義務教育ニ力ヲ用エルト同列ニシ

テ寧口強制的ナルモアリ極東收奪所ニ在ルハ倭虜ノ如キハ船吏ノ
チニシテ幼時帆船ヲテ「ウイルヘルムス」ハトフエビ「キール」軍航間ノ航行
ニ從事セシカ其一港ニ投錨スルハ巡視タル巡査ニ伴ハシ附近ノ出學
校ニ通學ヲセシメヨリト云フ

例 話

一倭虜ハ准士官所賣ニ詰ツテ曰ク日本國民ハ其國民精神所謂大
和魂ナルモノヲ大ニ誇張シ他國人ノ企テ及サル所ナリト自負シタルカ如シ
然レトモ吾人獨逸人ハ獨逸帝國ヲ愛スルノ理由ヲ知り又現實ニ
吾國ヲ愛シアルト取テ日本ニ讓ラスト信ス凡テ國民カ國民タルノ
立場ヲ知ラハ愛國心ナクシテ可ナラシヤ愛國心ハ必スシテ誇ルハキ
ニ非ラス其蓋シ國民ニテ當然ノコトナレハナリ唯愛國心ノ厚薄ニキ
リテハ比較シ易カラス古来愛國心ノ鞏固ヲ以テ稱セラルル日本ニ於
テモ喚起此精神ノ廢頓ヲ歎スル論者ニテ聞ク今ヤ獨逸人

民一般ニ其身命財產ヲ抛擲シテ偏ニ自國ノ存亡爲メニ争フノ情
況ヲ觀ハハ今日日本ノ愛國心必スシテ獨逸ノ愛國心ニ優レリトナスヲ得
サレハハ(極東)

ニ病死倭虜後備軍「キール」ヨウナルナル者リ獨逸「プレスラウ」ハ一少
農丈ノ子ニテ其教育程度ハ學子ヲ卒業ニ過キサルモ其忠實言書白ニ
於テ同胞ニ望ミテ曰ク予カ遠敵ヲ埋葬ノ後莫ク地ニ於テ「ドイツ」ナ
ランド「ドイツ」ナランド「愛國歌」ヲ合奏セヨト嗚呼一兵卒ニシテ死ニ
至ル迄愛國ノ志熾ナルト如此(大分)

三兵卒ノ老母ヨリ来レル書信ニ曰ク「目下家世畜賴ハ皆政存ニ登録セ
ニレ自由ニ屠殺スルヲ得ス從テ肉食ニ大ニ困難ヲ感ス然レ共是
比皆第一線兵士ノ給養長ヲ當カナラシムル爲メニハ忍耐セサルヲ得ズ此
老母ハ僻陋ノ地ニ居住スル低級ナル一農人家ノモノナリ而シテ此言アリ福
倭虜中破産耻漢ヲ出セト時「カイゼ」ニ對シテ飛懼ノ至リナラサト問ヒン

予ハ日本ノ倭虜アリ何等皇帝ニ對スル顧慮ヲ要セスト答ハ多ク(板東)
 云往々皇帝ヲ稱シテ「トマン」(此語ハ下士以下ニ用ヒラレ獨逸將
 二號スモ之ヲ知ラス或ハ西祖ト云フカ如キカ)ト呼ビ又皇帝ハ屢國
 ヲ以テ旅行シ皇帝カ其都度停車場ニ来リ之ヲ接吻ヲナスニ對シ諷刺
 的言辭ヲ弄シテ不敬ヲ意トセサル者アリ(板東)
 六倭虜ハ世佐ノ妹カ其父ニ送リタル手紙ノ一節ニ曰ク「又ハ三日夕
 會シ得ル爲メ日本國ニ参リ度ハ山ヲナレトモ一重ト雖モ敵國タル日本
 二人生ラ世良スハ好マレカヲサレハ参ルコトヲ止メ申候」ト其意ハ
 氣類ル掬スヘキモアリ(名古屋)

第三十章 軍人精神

第一概括的觀察

忠君愛國ノ精神ニ就テ前章既ニ之ヲ述ビ多ク故ニ茲ニ之ヲ省
 略シ以下其他ノ二点ヨリ彼等ノ精神ヲ概観ハントス

抑獨逸國ハ風ニ世ノ所謂軍國主義ヲ以テ國是トシ之ニ依リ世界
 易ノ霸ヲ握ラントシ陸海ノ兵備ヲ擴張シ其形体及内容ノ充實ヲ計リ
 之カ爲メ歐洲諸列強ハ耳目ヲ聳動シ之ニ備フハニ汲々トシキ而シテ
 今國歐洲ノ大獸ハ彼ノ内容ヲ精否ヲ守内ニ實證スルモノナルヲ以テ茲ニ
 贅セスト雖モ一般ニ彼等ノ獨逸軍人ヲ以テ最モ名譽アルモノナリト自
 信シ獨逸魂ノ鍊磨ニ努カレテアルハ凡ルモ多數軍人申元ヨリ例外
 アリ軍人精神ノ存在ヲ怪ムヘキモノ歟カラスト雖概シテ之ヲ云ハハ形而上
 形而下共ニ良好ニ訓練セラレハハ彼等ノ姿勢敬禮其他我余令視
 則ニ對スル服從心等ニヨリ知ルヲ得今以此ヲ是等ニ就テ觀察セントス

例 談

倭虜將校カ嘗テ下級所員ヨリ侮辱的行為ヲ受ケタリトテ訴ヘタルコト
 下ノ曰ク「獨逸軍人ノ名譽ハ終世保存ス假令倭虜ト雖然リ日本ハ辱
 憲ヲ亦之ヲ認メテアリ然ルニ如此侮辱ノ言ヲ受タルハ提テテラス也」

依テ彼ニ反問スルニ獨逸ノ軍紀ハ權威ニ服従スルコトニ依テ保有サルニアラ
スヤ今許フル所ハ其所員ヲ下級者ナリシ故ヲ以テノ如クナリト雖モ倭
虜心得ニ倭虜ハ所員ニ對シ絶對ニ服従ヲ要ス「トアルニアラヌヤ服従
ノ徳ニ缺クル所アリテ獨逸ノ軍人稱袖成立スルヤ斯クシテ尚名譽
ヲ要スルハ尚格アリヤ彼唯マトシテ日ク「吾共ニテ服従ヲ要スルノ
意モニアラス唯莫ク言辭相野ナリシヲ以テ云ヒレノ之云々(福岡)

第二服従

獨逸軍人ノ服従ハ心當ハハ世ニ定評アリト雖モ彼等ノ服従クモ所員ノ服従ニ
テニスレテ「三權利ヲ我利我利ノ觀ハ石ヨリ入致足シテ之ヲ躬行スルモノニ
非サルナキカラ疑ハレシトモ彼等ニ度服従ノ至我利我利ヲ悟レハ之カ邊
行ニ勉ムルコト誠ニ感スルキモアリ

例話

一 叔岩當日入浴ヲ準備シテ午後七時迄ニ入浴スルヲ得ト命令セルニ

午後九時頃一名ノ將校事務前來リテ歎願シテ曰ク「兵卒ハ連
日ノ旅行ニテ大ニ疲シカレシヲ以テ入浴ヲモ寧ろ口就寝ヲ希望ス願ム
入浴ヲ中止セシメテシテト吾人ノ觀望ヲ以テスレハ甚クシキ獨斷
ノ缺乏ニシテ入浴ノ如キハ吾人ノ隨意ニシテ就寝スルモ入浴スルモ彼
等ノ勝手ナルノ敢テ歎願ニ及ハサシカ如ク思フ者多シカルハキニ事
實アリテ即チ一度命セラレタルコトハ必ス遂行セザルカラスト爲ス其
服従的精神ニ至リテハ大ニ賞ス(キモアルハ一名古屋)

二 兵卒ノ將校ニ對スル態度ハ今尚中古ニ於ケル農奴ノ地主ニ對スル
遺風ヲ存シ將校ヲ以テ主然犯スルカラサル別種階級トシテ彼ノ
命ヲハ所唯ミトシテ從フ一大尉從卒ヲ呼ブキハ從卒階級ニ應ジテ
「ハイ……大尉殿」ニ幾回トナシ及復シテ今ノ他意ヲキコユス(似島)

三 倭虜心得中「倭虜ハ皆同一權利ノモノナリ」トノ條項ヲ見ハヤ彼等
上は是ニ對スル態度一變ニ其例證左ノ如シ

イ兵卒ノ下士ニ對シテ敬禮セラルハ勿論下士亦自己ノ舊中隊長ニ對シテ亦敬禮ヲ行ハセルニ至ル(板東)

ロ兵卒ヲ腕ヲ組ミ輕侮ノ態度ヲ以テ將校ト爭論スルヲ見ル(板東)

ハ從卒ヲ附スルニ方リテ、^望者ナク毎日比較的多額(月額廿四乃至八
月)ノ報酬ヲ與ヘ斬ク劣等者ヲ得ル現況ナリ(板東)

ニ自己ノ舊中隊長ニ抗言罵詈言シタル兵アリ大尉ハ憤慨ニ平和克
復ニ於テ重大ナル處分ヲ爲スヘク感齎セリ

然レ兵現在普通教育等ノ教授ヲ受ケツ、アル上官ニ敬禮ヲ缺
クコトナシ(板東)

四敵國內ニ俘虜トナリタル境遇ニ相互ノ同情切實トナリ相頼リ相
援ケ苦難ヲ共スヘキ人情ナルニ彼等ノ間ニ此情安外ツク同僚
相違ヒ上下ノ間ニ喧嘩口論ヲ放テレ若クハ暴行ヲ加ヘ兵卒ニレテ下
士ヲ批難シ從卒ニ^預將校、非行ヲ訴ヘ將校下士ニテ兵卒ノ處罰

ヲ要求シ又將校間ニ^三四黨派ヲ果シレ^一至テリ食卓ヲ同クセサル者
多々ナリ(似島)

五下士卒間ニ服從道全ク行ハス拒路收容當時下士ヲ健康保持
ノ目的ヲ以テ徒手体操、指揮實施セレントモ之ニ對シ兵卒ハ
左ノ如ク訴ヘタリ

元來我々ハ兵營ニ在リテハ下士ニ服從スヘキ義務アルモ今日俘虜
トナリ同ヘテ待遇ヲ受ケツ、アル下士ニ對シテハ何等服從スヘキ義務
ナシ依テ体操實施、如キハ各人ノ隨意ニセラレタレ(青野翁)

六如何ニ反對ノ意見自ラ有スモ且規則トシテ命セラレタル事ハ一言ノ
苦情ナリ之ニ服從ス畢竟彼等ハ極小ノ頃ヨリ規則的教
育ヲ受ケタル結果ナラシカ(若石屋)

第三武勇

獨逸國兵ハ古來尚武ノ氣ニ富ミ又是カ秘養ニ努力シテ雖本
二一

邦人カ有スル獨特ナル武勇ト異ナルト彼等ノ忠君愛國的精神
カ根柢ヲ我ト異ニシト其規ヲ一ニ即チ吾人カ有スル如キ犧牲的
精神アルニテラスシテ唯義務精神ニシテ其出發點ニ於テ其思想
ノ根本ニ於テ實ニ千里ニ差アリ我國民ハ戰場臨ミテ生還セズ戰敗
ルレハ必ハ身ヲ以テ國ニ殉スルヲ其本務トシ楠公ノ如キ討死ニ臨ミテ七
度生レテ朝敵ヲ滅ボサント折言ヒタリ然レトモ彼等ノ間ニ此ノ如キ
崇高ナル精神アルニ非ス義務ヲ盡セリトモ敵軍ヲ向ケルモ恥ト
セズ又自ら好ニテ保身屠タルニ至ルモ唯若シ其將帥ニシテ統帥宜シキヲ
得ニカ彼等ハ場合ニ因リ決シテ生死ヲ顧ミルモノニ非ス彼等ハ
怯懦ナルニ非ザルナリ上速ノ如ク彼等ノ軍人精神ハ吾人カ有スル大
和魂即軍人精神ト其根柢ニ於テ異ナリト雖其結果ニ於テ必
ズモ相背馳スルニ非ス之ヲ善用セハ侮ルハカヲオレルモノアルコト確信ス
井他徳義賢勇者等諸徳就テハ記載セルヲ以テ省略ス

第四十章 軍人ノ素行

收者所内ニ在テハ軍事學ヲ研究ヲ禁止シテ以テ彼等軍重能
力ヲ判断スルヲ得ガル道徳トス然レトモ所員ノ眼ニ映シタル彼等
ノ素行其他諸事トシテ記載スル所アラントス

第一將校ノ素行

獨逸將校ノ名譽職トシテ社會ノ上流ニ位シ其出身多クハ貴族
カ然ラレモソクモ中流以上ノ生活ヲ營ム者ノ子弟ナリ從テ世人ノ尊敬
ヲ受ケ又兵卒ノ將校ニ對スル觀念ハ身分上根本的區別アル者ト思
惟シ強制的服從ヲ餘儀ナキモノト断念ス吾人カ兵卒ニ對スルニ
權威ト徳望トヲ以テテ士以下ニ誠心ノ服從ヲ要求ス者ト内攘
ノ差アリト云フヘレ故ニ俘虜トナリテ以來階級ヲ認メラレズ將校トシ
テノ權威カ失フヤ將校ニ對スル兵卒ノ態度豹変レ却テ反抗的
態度ニ出スル者アルニ至リタルヲトシ第ニ章ニ述ヘタルカ如ク俘虜
ニ

テ優レリトスモ其優越ノ程度ハ本邦ニ於テハ豫備役中少尉
ト現役者トノ差異ハ三ツカ如シ然レトモ下士以下ニ對シテ豫備役者
ノ人望ハ寧ロ現役者ヨリモ多ク良好ナリ是レ青島戰中現役將校
(主トシテ海軍將校)ノ怯懦ナリニ反シ豫備將校勇敢ナリニ因レシ
ト雖海員際ニ其學識才能ニ於テ現役將校ヲ凌駕セル者多カリ
レカ故ニ獨逸將校以下士以下ト苦樂ニ若ニスルノ美風ナク却テ彼等
ニ接近スラカテ自レシノ地位ヲ偏ケルモノト思惟シテ下ノ間ニ其志モ温
情ヲ見ルルキヤ

例 詰

一外出運動以下士以下ト分離シテ海軍施セシコトヲ屢歎願セリ(板東)
二將校ノ屋外ニ休憩所ヲ造ランコトヲ願出テレカテ之ヲ許可セシ兵
卒モ亦之接テ四阿ヲ造ルハ願出テ相互ニ其區域ヲ激論ヲ闘ハシ權

利ヲ爭ヒテ下ラス我所員裁決ニ依テ靜肅ニ服セリ(板東)

第二下士ノ素行

獨逸軍隊ニ於テ下士ノ優劣ヲ就テハ屢見スル所ナカ實際今日彼
等ニ接シ其感ヲ深クスルモノアリ獨逸軍隊ノ今日ノ所以其原因多ク
ヘシト雖モ下士優劣ナル技術ハ其主原因ノ一ナルヲ矢ハセルヘシ
下士ノ軍事的方面ニ幾何ノ手腕ヲ有スヤリホク觀察機會ヲ得テト雖
モ彼等ノ勤政或リ作業監督ニ兵卒ヲ指導シ或リ取締ルヲ手腕ニ
感スヘキモノリ彼等將校于ノ煩ハスコトナリ命セラシタル業務ヲ監督
指導スル能カアリ從テ將校ハ唯適切ニ命令シ下セリ可ナリ
本邦軍隊ニ於テハ往々兵卒中技術教練ニ於テ下言リ勝ルモノヲ見ルモ
彼等ニ於テ下士ノ素行能度敬禮萬般ニ於テ兵卒ノ水平ヲ抜クコ
ト高ク一見兩者ノ判別シ難クスニトシテ行ヘシ

下志勤務勿論普通通譯その他除隊後之願慮口も亦美食之爲メ
銳意勉勵ス殊ニ現役以下志當ニ郵便電信街道等ニ関スル研究ヲ
怠ラス又豫備役下志戰前東洋ニ在リテ多クニ同輩ニ從事セシ者ニ
シテ同志者ニ依テ相集リテ或日本語支那語英語ヲ研究シ或リ商
業ニ関スル著書ヲ涉佩シ以テ將來發展ノ資ニ供セトスモノハ他レ
元來獨逸下志ノ文官採用ノ範圍ニ屬シ從テ在潛問退隊後
糊口問題ノ爲ニ握裁スル要ナリニ意專心軍務ニ執着スルヲ得
斯クテ在隊九年乃至十二年ニテ滿期トシテ技能ノ優劣ヲナル否トヲ
問ハスニ前科ヲ有サル唯「證明」トナリ社會ニ信用ヲ得ルニトナリ以テ下
志志願者ノ常ニ認定人員ヲ超過スルヲ趨勢テリ一下志曰クアリ元
來指物師ノ子ニシテ性質此職者ニ適ス且ツ自ラ指物師トナセニ
シテ欲セザルニシテ軍隊入りテ終生勤務ヲ決心シ今ヤ既ニ十二年

ヲ經過シタル然レモ他ニ優劣者見ル爲容易ニ准士官ニ任ラシス此以上尙軍隊ニ止
マント欲スルニ則途見込メテ故ニ際技能證明書ヲ得テ郵便局ニ入ルニ然ラハ
ハスレモ下僚又「エ」ト結管スルノ要ナキヲ得ヘシト

又救済收容所ニ於テハ火災豫防上ハ住居内消所隊ヲ組織シ豫防ニ任テリ
其組頭タル者ニシテ部下ヲ率ヒ重役所内ヲ敬重視シテ完全ニ任務ヲ盡シ
居リ所長本人ノ誠意ヲ認メ若シハ鉢使用ノ期間中全ク重ナキヲ得ハ
汝ノ功績ノ大ナル對テ汝ノ賞品ヲ得フヘト云ヒニ彼謝シテ曰ク賞品ハ一
時的ノ願クニ終身的ニ向テル子職務勉勵證書ヲ附テラシメ是レ
予ハ社會ニ於テ信用ノ有ラレバ證明ナレハナリト

第五、兵卒ノ素小質

獨逸國ノ普通教育完全ナリ以テ無知者ナク身體強健且長大ニシテ
膂力アリ尚忍耐ノ富ニ容易ニ疲勞ヲ覺スニ位ニ稍遲鈍ニテ判斷

刀之シキ者ナキ非サレバ自レ職業ニ関スル皆識ニ於テ違ニ我國民ヨリ
優劣アリ彼等與ニ生縛密ニ規則ニ良好ノ指導ヨリセリ能ク規則
ヲ遵守シ候ハテモナルヲ以テ其成果常ニ天ニ見ルヘキモノアリ信テ廣ク下ニ
並致育程度ハ附表第三ニ此レ

第五二章 倭廣トテノ觀念

倭廣ヨリテ對テニ名譽トナシ概キ云ヘリ自ラ所謂名譽ナル信テ廣クナリ
ト思テ考スルハ彼等々々類者青島戰役ニ於テ國家ニ對スル任務ニ究
全ニ果シタリト自覺シ其ハ上無辱ヲ抵抗シ絶續キ徒ニ生命ヲ失ハニヨリハ
儘白戰後母國家裏ニ歸リ得テ高價信テ廣クナラ策ノ得タシモノトセリ而シ
テ戰斗カキテ敢テ死ニ赴キ外ナリ全然徳爾ニ屬シ寧ロ人道ニ違ニ國家ノ
損害ナリト主張スモノナリ然レモ又中ニ吾人ハ最後迄戰ハントセシモノ首
將降伏セヨリ以テ己ノ得テ信テ廣クナリタリ決シテ法懼ナルニテナリ

上稱スル如ク其具原意計リ難シ唯信テ廣ク士卒ノミナラズ本國ニ於ケル
般人トモ亦彼等信テ廣クカキテ其勇武ヨリテ敬賞スルムテ彼等
ハ益自ラ名譽ナリト自信シ得タシモノ、此レ信テ廣ク父兄カキテ、此ヲ勇武者
コトトセシヨリ喜フトト書信ヲ送シテ若キルヲ見テ知ルヘシ也之彼等信テ廣クハ
其名ヲ不朽ニ傳フテ戰死者戰傷者同權ノ名譽トテ敬上ヨリ及クモノ、和
夕解釋ハ六海各信、其不立テ反立テ有リト信スルカ也

例

一 松山社ニテ本國新聞掲載ニトモナリ其他本國ニ抄録
ノ處ナト交通シ望ム者廣クモテトテ歎願セシ者アリ誠ニ之ヲ許可セシニ對
シ信書繪葉書多額到著シ檢閲上其功程ヲ影響音ヨリ及ホセリ(板東)
二 或日一宣教師來リ談話獨軍一テ大隊敵ニ包圍セシ全隊降伏シテ當
時新聞記事ニ及リ彼曰ク此際奮闘スルモ効ナシ徒ラニ損害ヲコトシタケルヨリ

三、寧ロ一旦降伏シテ後日更ニ國家爲主無ス、優ヒルカスト(名正屋)
三、存唐トシテ字品ヲ輪定、途程ハ道ノ人民輕蔑的ニ思ハルヲ存唐ノ
ト呼ビテ彼等後日手紙ニ次ノ外ノ記セリ

日本ノ常ニ在ルニ過スニ武勳赫々シク戦フルヲ之ノ餘道輪運ノ際ニ於テ
モ若干ノ日本人ノ噴勇敢ナル兵卒ヲ名譽ニシテ存唐ノ呼ヒテリ
(名正屋)

四、存唐トシテ觀念上近ノ地キヨク彼等ノ存唐敢テ退縮的ナラズ我
官憲ニ對シテ遠慮ヲナク勝手氣儘ナル情願ヲ申出ルニ由ラス例ハ一候病
ニ際シテ東京又福岡行キ治療ヲ受ケタシ或リ事ト海ニ病願カリ看護
ニ爲テ旅行許可ヲ得テ稱スルカ如シ(大分)

廿六 立身 宗教心

由來歐人ノ宗教心ハ極テ熾シク道ニ我觀念ハ之ニ依リ培養セシ國
宗的觀念ハ至偉人精神之ヲシテ運差公セリニテマト信シタルモ之ヲ存

廣ニ徴シテ心々之具然ラセリト知ル然レドモ獨逸カ既ニ學校時代ヨリ見
董ニ宗教ノ注入シ兵管ニ入リテ後モ尚三週乃至一月三回ハ寺院ニテ
説教ヲ聽クコトヲ強クトシテ唯信ト信ト稱テ之ヲ見ルニ一般ノ願心誠意
ナキ信仰ナリト斷言スラ得テ獨逸宗教ハ新教徒ニ分ニ乃至五分、四ラハ
他ニテトシテ旧教徒ナリ而シテ其信仰ノ度ハ新旧兩者ヨリテ異ナリト曰
教徒ハ嚴格ナル儀礼ヲ有シ多ク其儀式ニ依テ信仰ヲ養ハントスルカ如
ク徒テ吾人ノ目ニ映ル所ニ依テ旧教徒ハ宗教ヲ勢心ニシテ其性行皆温
順篤實ナルカ也

新教ハ獨逸カカテ國片ハ的精神ニ之を養成シ身ニトシ皇ニ帝ニ於テ銳意
之ヲ發達シテ國ニシテ之ヲ宗教ニ政策ノ加味ナリ然レニ收容所ニ於テ
ハ多少モ國片カ主ニ我ニ味セシ説教絶對ニ許コトナラシテ存唐カ多ク
クニ寧ロニテ領事ノ欲スル席者常ニ極メテ少數ニテ偶々遠隔ノ地ヨリ

宣教師來訪ノ豫報ニ接シ欣然心停虜キニ非サキ之ヲ説教其者ヲ
喜ニ非スニ此後ニ亦或國團ノ狀況ヲ聞キ親戚ノ安否ヲ問フ等
自己ノ用務ノ處便ヲ樂シムト過キ

夫々起床後就寢前ニ於テ祈禱又禮拜ヲ爲シタルモ、ヲ見ケルコトナク宗
教又ハ信仰等ニ就テ何等研究説話スルヲ閉セルトナシ新教宣教師來
リテ説教スルヤ旧教徒其備遊戯ヲ爲スモ逐ニ身ヲ傾ケル方又自ラ信ス
ル教義ヲ説教雖一般ニ進ニテ自動的ニ開クトス者小教ヲ現ニ宣教
師ニ説教豫報自ニ重改ノ爲メ中止電報ニ接ヤリテ打テ喜ヲ常ト
セリ彼等ノケリスミヲ祝シオスタニ祭ヲ祭ルノ熱心ニ盛ニ酒肴ヲ
備テ會飲スルノ之本邦人、氏神ノ祭日ヲ祝ヒ正月ヲ祝フ、何等異
ルナレ虜ノ宗教別ヲ附表第卅例

例註

一 虜ニ宣教師來リテ説教中ニ英國ニ傳リ佛國ニ傳リ或ハ獨逸ノ世界
ニ於テ最優越トシ又ハ世界ニ於テ神ノ外ナル者ナシ等古人ノ言ヲ引キ
大敵懐心ノ發揮ヲ導キテ彼等ノ負ハ甚ナリ其ノ負タルニ彼曰ク「獨逸
ノ新教此ヲ此ヲ重ク説クニ世ニ於テ説教非ハ下ニ爲^ス」
此ニテハ「名ニ在リ」

二 豫備海軍少尉ナリヤリハ旧教徒ニテ當テ青島戰役後ニ於テ最
モ勇敢ニ戰フ故ニ他ノ傳虜方ヨリ賞賜ヲ受ケル者アリ彼大阪収
容所後級何ナラス大阪居住佛國宣教師來リテ傳虜方ヨリ慰問セント
シタルニ傳虜將校一同ハ其敵國ハハ故ヲ以テニ面接スニトテ拒絶セ
ルアリヤリヤリハ耐^ル獨リ曰ク宗教ヲ國境ニテ流シ彼好意ヲ以テ
我等ノ慰問ヲ受ケルニ於テヤ具言志ヲ無スルヲ思ヒスト乃チ他將校ノ骨
連的言辭ヲ願フニ自ラ赴クテ面會セリ(以島)

又如何ナル寒ノ氣風雪ノ日ト雖食後就寢前ニ居室外ニ出テ若干ノ散步ヲ行フ要スルニ彼等ハ本邦人ノ如ク開シ得ル者モ然ラズ然レモ其日ヲ送ルニナラズ必ス何事カヲ述メ何事カヲ爲サントスル良習慣ヲ有ス

彼等ノ体操運動ヲ行フニ一面休息ノ意味ヲ含ム寒天ニ禱禱一枚薄著ニ馳歩ヲ行フテ或リ炎燬ヲカサキノ日ニ「トボリル」「アストボル」テ「マ」行フテ器械体操ヲ行フアリ而モ此内ニ國民軍後備役ニ屬スル白髮ノ老耆多敷リ彼等轉例シテキ足ヲ傷ケルニトアルモ高モ碎易スルナラ字ヲ以テ淋漓多ク鮮血ヲ搦リ遊戯ヲ繼續スル收容以來受信車ハ有ニ病類別中不慮外傷著シキ位ニ依テ一班ヲ察出スルニ要スルニ彼等ハ能ク勉メ能ク遊ビ能ク鍛練スル國民ニテ到底飽食暖衣隨眠ヲ貪ル國民ニテラス彼等ノ任業ニ著キスルヤ全カラ其レテ其レ成ニ勉ム即チ朝ハ點時後直ニ午後日没迄任業シ正午ニ於テ若干ノ休息ヲ

取ルニ其他ハ絶テ雜誌ヲ交ヘス

一般別居ノ好ミ出來得ル限リ居所ヲ他ニシテ遠テテ即チ各自其個人的範圍ニ守リテ互ニ相侵サザラントウ努ム彼等ノ特性及習慣上言行並直他ニ對シ全然無遠慮ナル爲居室内ニ於テ和氣駿然タル一團樂ヲ見ルテ稀ニテ同一居室ニテリテ一言ヲ交ハルハ最モ述ハタル所ナリ彼等ニ其理由ヲ問ハハ是レ居室ニ多敷ク同居セムルカ故ナリ各人別居スルニ決テ斯ル結果ヲ生スルニテナラズ

又彼等ノ生活狀態ヲ見ルニ總テ今業的ナリ即チ彼等ノ職業其他ヨリ洗濯ヲ行フ有リ便所掃除スル庭園掃除ヲ擔任スル者アリ尙新聞紙ヲ譯解運動係救恤委員ニ任ズル者アリ其他何等カ他ノ生活上一ノ一業務ヲ分擔サルナレ筆意其生活全ク組織的ニテ然然一社會ノ縮圖ヲ成形ス

第八章 衛生思想

醫學進歩し故に普及せしむる爲に獨逸國民一般衛生思想發
達せしむるに顯著なる彼等一般偉大ナル體軀に賦有せる筋肉ト
有る而も今下滿三年有餘停慮生活ヲ管諸種自由ヲ束縛セラレ
ルニ係ラス能ク良好健康状態ヲ維持セリ正衛生思想運告セシテ
左タラスハアラス既に第七章モ述ベタル如ク彼等毎朝冷水浴或ハ冷
水摩擦ヲ爲シ又運動ヲ怠ラス尚食物ト消化養食ノ關係或ハ衣服
ト健康トノ關係等ヲ研究セリ然レトモ彼等又一面於テ視神經
質ニテ致ニ刺サシテ診斷ヲ受クル者アリ或ハ外科的ニ手術ヲテ腦
貪慾ヲ起シ或倒スル者アリ其運動ニテ大膽活潑ニテ骨節者多キ
ニ照シテ金ク安外感ナクハアラス
個人衛生ヲ重ニスルニ拘ラス而も潔ナル觀念ハ稍々無識者ノ傾向アリ例

身體檢查ニ時身辺ノ不潔ナルモノ多キカ如キ又彼等ノ寢具ニ塵
ハ多キカ如キ或ハパン其他ノ食料品ヲ塵埃多キ處ニ放置シ甚クシ
靴ト下着ニ陳列シテ並然タル者見ケル其衛生思想有無ヲ
試ハシタル者アリ然レトモ又毎食後必ス口ヲ漱スル者或ハ腰痛
痛多シ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信ニ信
志シ又單ニ感冒ニ罹リテ咳嗽時左側胸痛ヲ遍ル者尙ハ職階高
キニシテ此等ノ者アリ又要スル社會的地位ニ在ル地方の風習教育程
度等ヲ考テ一舉ニ論ニ去リ難キ所ニテ藥物ノ効能ヲ述ベ自慢者
其用法ヲ説キ飲食物ノ生理的關係ヲ説ク者アリ又或ハ於温
室トシテ轉倒ニ眩暈ニ挿入スル者アリ或ハ齒痛多キ者異人感アリ
之而シテ輕微ノ齦齒ニ對シテ尙ハ不治齦齦應ヨトト本邦人比
ニ在ラス是或ハ齦齒者ノ多キ能キ感ヲ起サシムル一因ナラカザラ獨逸

政府ノ意圖ナリトテ各人編出ニ收容期間ニ資金ニ治療スヘク其費用救護會ヨリ支出スヘシト申出テタリトアリ

例 話

一 身体ニ異状ヲ感スルハ如何ニ輕微ナルニ症狀ト雖直ニ受診スルヲ常トス
(習志野)

二 日光浴ヲ試ミ又日常ノ食物モ能ク吟味シ僅少ノ異臭カレモト雖之ヲ食セズ又食物調理ヨリテ却テ皮膚癢埃等ヲ微細ニ注意シテ除キス(習志野)

三 浴室ニテ含嗽スヘカラスガレ旨覺言ヒ又之貼附セルヲ見ルニ我國ニ於テ往々風呂屋ノ一隅ニ放尿シ浴槽内ノ湯ヲ以テホシ洗フ者アルト比スルハ衛生思想ノ發達ニ否ク能ハス(極東)

第九章 雜件

第 感情發覺

西洋人ノ感情強トハ一般評言リ彼等モ此例ニ淺ルコトナリ
喜怒哀樂ヲ直ニ表情スルト本邦人ノ感情ヲ仰テ常ニ泰然自若タル比ニ頗ル弱者ノ感アリ

例 話

或日軍醫自ハ停屠ノ齒痛ノ爲メ腫張シタル頰部ヲ切開セ下シタル彼等大聲ヲ發シテ泣キ遂ニ堪ヘ得カレヤ走リテ自己ノ班ニ歸ル數回ノ招致ニ對シテ遂ニ來ラス

其他輕微疾ノ恠モ直ニ死ヲ叫ビ不眠ヲ唱ヘ或ハ外科的治療ヲ壓ヒ治療降シテ大聲號泣シ其トキニ至リテハ卒倒スルモアリ(習志野)

第二 盜癖

把行取調等ニ對シ彼ニ屢ニ屢ニ陳述ヲ爲シ容易ニ宣明ヲセカス

領不次泊ナリ彼等ハ自己ノ物品ヲ錠ヲ知テ格納ス錠ヲ知テハ

此レ已ラ但サモノ如クテカ知レ
收容當知酒保ヲ麥酒ノ空箱ヲ飛ツカ知レ彼等ニ購ホリ
其箱ハ糖皮草ト錠前ト以テ堅固ナル空箱ニ變化シ斯クテ三
ヶ月後ニ各人殆ト一箇ヲ所有スルニ至レリ之ヲ兵煙管ニ下シテ
付ノ空箱ヲ比スルハ實ニ突撃ヲ值スル現象トアリナルハカラス彼等ハ
元ヨリ盜リコトヲ罪惡ナリト思惟スルモ亦無ル者モ亦保管法不確安
ナリト嗤笑スルハス

例 詔

- 一 錠硝子ヲ破損シタル者ハ自償セシムルハ規定シタル故ニ自室ヲ硝子ヲ破
リタル者ハ空室ヲ硝子ヲ巧ク盗取スルコト往々アリ(板東)
- 二 作業小屋ニハ松貫ニ電燈ヲ点スル者アリ而シテ其電球及管ハ

厚シ盗難ニ罹ル(板東)

三 新靴金銭ヲ盗ミ或リ煙草珈琲麥酒等ヲ盗取ルコト許ハ出ル
者アリ之ヲ調査訊問嚴シ極ト雖モ犯人ハ出テ来コト多ク
犯行嫌疑者ハ多數ノ者アリ彼等ハ認定セラレ置(四言)毆打至ラサル
ナキニ證據ヲ擧ケテハ限リ白状ス(トナシ)(板東)

四 他人ノ名ヲ以テ盗ノ治療シ受ケタル者アリ其完成後代金ヲ請
求セシモノ者トヤ遂ニ不明ニ歸セリ又金冠離シタルモノハ無料治療
ヲ申出シモノ他ノ齒科醫員格出シキニ成リシモノヲ登見セシ遊去
ト(板東)

第十章 結論

凡ソ國興亡盛衰ノ跡ヲ探ヌルニ其因テ來ル所必ク民心ノ弛廢堅
張ニ非ザラン古哲曰ク敵國外患ナキモハ國恒ニ亡ト古今不易ノ金言

他に策ナカラン而シテ他才國民間斷ナキ和氣ニ與ヘハ皇運長
 久ト國勢ノ發展ト期スル蓋シ易クタルハレ之カ爲國民ノ義務
 教育ヲ益々督勵スルト同時ニ教師ノ人格ヲ學識ヲ向上セシメ德育
 爲一層カヲ倍從シ尚一面ニ於テ國民比皆兵ノ主義ニ應ニテ軍事
 思想ノ普及ニ意ヲ用ユル策ヲ採ラハ或ハ自國ノ國運ヲ更ニ無限ニ
 發展セシメ惡思想ノ瀰漫ヲ遏止得ルニ庶幾ランカ
 附

倭虜ノ對テ國ニ對スル觀念
 一日本ニ對スル觀念

本邦ニ對シテ眞實ノ感情和心ヲ吐露スル者ナキハ其所ナルヘキモ聯
 合國中憎惡ノ念最モ甚キモノ、如ク彼等曰ク日本ハ英國強
 請ニ基キテ青島ヲ攻取キセシモノナリ平和克復後ハ之ヲ我ニ還付
 スルラント又曰ク獨逸ノ日本ニ對シ好感ヲ得ンカ爲新聞雜誌ニ曰

本ノ反感ヲ買フ如キ記事ヲ掲載スルコトヲ極力セシコトアリト曰ク將
 來世界ニ東西二個帝國者ヲ生スヘシ一ハ日本ニシテ一獨逸ナリト尙我
 國ニ對スル管見ニ増記スルハ左ノ如ク

例 語

一 下士曰ク日本軍ノ步兵射撃ノ常ニ不良トキ予曾テ前進陣地ノ下
 士哨ニ服シタル後哨所ニ撤退スルニ當リ日本兵ノ前方約三百米地
 點ニ兵卒二十名ト共ニ側方ニ約二百米疾駆シタリ此時約一中
 隊ノ日本兵經列ニ射撃セルモノ、損害ナカリキ又或下士
 曰ク日本兵ノ射撃不良ナルヲ以テ我兵ハ決テ敵彈ニ命中セザル
 モトト信シタリト

- 二 和服ヲ奇異感シタル者少ナク寧ロ其便利ニテ且若者心地良キ事ヲ
 當ク
- 三 食物ノ運動儘ニ日本人ニ適スルモノナリトシ彼等將校ニ運動ナシ
 三五

ヒ得ザル使島ニ在リシ際ハ全員日本食ヲ採リタリ然レドモ元來
脂肪分ノ極メテ少キヲ非難ス

四、住家堅牢ナラスク階隙多キ夏冬ニ適スル冬ニホキニ適スル尺
建築費ヲ要スルコト少キヲ一得トスルノミ

五、市中ノ店頭ヲ見ル商人ノ多ク火鉢ノ一側ニ坐シ煙草ヲ燻ラシ街
頭ヲ眺メシ、アリ記帳其他ノ仕事ニ勉メアルヲ奇異トス

六、商人ノ違約特ニ時間ヲ守ラザルニ敬重シ居リ

七、商人ノ記帳不整正頓乱カ故錯誤多ク不安心ナリ

八、商人ノ努力及能力充分ナラス酒保商人ノ能キ我々嗜好ヲ習慣
シテ分研究セラルルモノ販賣又障多シ甚シキハ既ニ第
四回ノクリスマス祭ヲ迎フルモ拘ラス其果シテ何タルヲ解セス當目ノ
為特別ニ賣品ノ準備ヲナサル商人アリ

九、荷車ヲ馬ヲ使役スルヲ以テ障カレテトラ富初不可思議トセリ

十、山腹地ニノ收畜ヲ營ムルヲ見ス又伐木及植林ノ意ヲ用セザル所多キニ驚
ケリ

十一、農家ニ堆積肥料ヲ有ス又乳牛養豚ヲ副業トセル者稀ナリ

十二、大地主ランキ者少シ此處ニ就テハ農民ノ力平均シ却テ一般ノ幸福
トラント思考スル者多キカ也

十三、橋梁道路構築ヲ見ルニ悉リ薄弱ナリ

十四、工業家ノ使用スル器械ヲ見ルニ様式時代後レノモノヲ用ヒアリ(鉄
工所製材所等ニ於テハ觀察ナリ)

十五、靴底薄シ獨逸ノ用ルモノハ殆ド倍厚ナリ有ス

十六、器具家具類ノ製作品薄弱ナルモノ多ク椅子ノ能キモノハ
最モ脆弱シテ匡ニ加エザルハ用元能ハス

二、英國ニ對スル觀念
英獨兩國ノ性格ノ相違及兩國間經濟的競争ノ結果其

國民ノ反撥排擠非常ニテ一兵卒ト雖英國ヲ憎惡嫌忌スルコト
甚クシク事々毎ミ之ヲ馬倒シテ已ニス英人ヲ呼ブニシテガレノ語
ヲ以テシテ曰ク英人ハゴレノ民ニテ海員行ノ民ニテラス階落セル生活ヲ
營ニ運動遊戯ニ耽リ自己ノ欲望ノ爲ニ其ノ天職ヲ第下スル
國民ハ伸ト稱スル假面ヲ創カテ唾棄スニ徒々又曰ク青島攻
圍戰中英人ノ次ヲ見ケル者ナシ之レ後ガニ在リテポートボールヲ
セラシメアリシナラニ而シテ日本軍人隊尾ヲ附シテ漸ク入城セシ噴飯ノ
至リナリト然レトモ商世ホニ於テハ大恐慌シタルモノハ独シニ於テ
第流ノ實業家ノラニハハス先ツ倫敦至リテ商業上ノ研究ヲ遂
ケサルヲ得ス故ニ漢僑ニ商業同盟ノ作リハ各歳多ク教ヲ秀オラ倫
敦ニ依リテ商業ヲ取リテノ機微ヲ學バシムト云フ
三、佛國ニ對スル觀念
佛國ニ對シテハ憎惡ノ觀念比較的薄ク到底英國ニ對スル比較

スルモノエラス却テ佛國人ヲ以テ歐洲戰場最勇者ナリト稱揚
シ我好敵キナリト呼フ程ナリ

四、伊國ニ對スル觀念

三、國同盟ヲ脱スル北背德者ト呼ビ且彼ハ背叛我ニ於テ此モ痛
癢ヲ感ス彼撤視國反果ニ何カ爲サ下嘲リ英國人ニ惡キテ憎惡
アリ

五、露國ニ對スル觀念

露國ニ對スル憎惡ノ念極キ薄シ且露國ノキエカ下ハ無學子文盲
ノ輩ニシテ訓練亦分ナラス將校而無能ヲ徒々到底我敵非サ
ルナリ又其ノ不潔云フヘカガサレシ笑フ

六、米國ニ對スル觀念

歐洲戰亂第三年ノ百迄米國ハ停戰ノ利益關係ヲ代表スル
唯一ノ庇護者ナリ故ニ彼等ハ哀訴情願其他萬事ヲ米國大

便道詔其希望ヲ達セトシ大ニ好情ヲ有シ居タリト一朝英獨
 國交斷絶スルヤ忽然態度ニ變シ之ヲ憎ムト英國ニ對スル由來
 去ス又兩國ニ對シ奇異ノ言ヲ弄ス者アリ曰ク近キ將來ニ於
 テヨシトシ米國人ノ患ニノ住家ハ富收容所ナルヘト

附表第一 其一

獨逸俘虜体格検査表

區介	將		下		兵		卒	
	人員	一人平均	人員	一人平均	人員	一人平均	人員	一人平均
胸圍	九	三、一〇	三、	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇一	三、〇三
身長	二〇五	五七六	八三二	五七〇	三、七	五、六	四、三〇	五、六四
體重	一九五	五七六	八三二	一九五	三、七	五、六	四、三〇	五、六四

其ノ二

獨逸俘虜体格検査表

區介	將		下		兵		卒	
	人員	一人平均	人員	一人平均	人員	一人平均	人員	一人平均
胸圍	九	三、一〇	三、	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇一	三、〇三
身長	二〇五	五七六	八三二	五七〇	三、七	五、六	四、三〇	五、六四
體重	一九五	五七六	八三二	一九五	三、七	五、六	四、三〇	五、六四

三八

本邦陸軍諸兵種体格検査表

區分	第一期			第二期			第三期			平均		
	人員	一人平均	胸圍	人員	一人平均	胸圍	人員	一人平均	胸圍	人員	一人平均	胸圍
自體重量	一五三三	五三二	二四〇四	一五六六	五三四	二三八四	一五六七	五三五	二八五	一五五三	五三四	二八三
身長尺	一五三三	五三二	二四〇四	一五六六	五三四	二三八四	一五六七	五三五	二八五	一五五三	五三四	二八三
胸圍尺	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一	二八一

ノ本表陸軍省大正五年統計年報ニ依ル
又検査期第一期ノ管日第一期第二期夫々其翌年十月ニテ概入

附表第三

但し廣下ニテ平均教育程度一覽表

程度	人員	摘要
大學校及之同程度ノ學校卒業業者	七〇	Universität, Technische Hochschule
高等學校及之同程度ノ學校卒業業者	四三二	Hochschule, Realgymnasium, Gewerkschule
中學校及之同程度ノ學校卒業業者	五六六	Realschule, Lehrerseminar, Berufsschule, Fortbildungsschule
高等小學校及之同程度ノ學校卒業業者	五二五	Realschule, Fortbildungsschule
小學校卒業業者	四六	Realschule, Fortbildungsschule
尋常小學校卒業業者	三三三	Realschule, Elementarschule, Spandauer Schulhaus

紅坡洋日

日期	風向	風力	浪高	雲量	溫度	濕度	視程	其他
10/1	北	3	1.5	100	15	85	10	
10/2	北	4	2.0	100	16	86	10	
10/3	北	5	2.5	100	17	87	10	
10/4	北	6	3.0	100	18	88	10	
10/5	北	7	3.5	100	19	89	10	
10/6	北	8	4.0	100	20	90	10	
10/7	北	9	4.5	100	21	91	10	
10/8	北	10	5.0	100	22	92	10	
10/9	北	11	5.5	100	23	93	10	
10/10	北	12	6.0	100	24	94	10	
10/11	北	13	6.5	100	25	95	10	
10/12	北	14	7.0	100	26	96	10	
10/13	北	15	7.5	100	27	97	10	
10/14	北	16	8.0	100	28	98	10	
10/15	北	17	8.5	100	29	99	10	
10/16	北	18	9.0	100	30	100	10	

